

『源氏物語』の「恥」「恥づかし」等に表れた美意識と倫理観

古屋 明子

一 はじめに

古語「恥づかし」の意味の特色は、不特定多数（世間）に対してだけでなく特定の人物に対する劣等意識も強いこと、そしてその人物への賞賛の意味もあることであろう。このように自他の関係にもとづく「恥」への意識は、『源氏物語』の中でどのように描かれているのであろうか。

先行する『竹取物語』では、天皇や高貴な身分の者に従うという常識的な認識を表す「かしこし」に代わって、「恥」や「恥づかし」という世間を恐れ「人間き」を重視する認識が強調され、天皇の権威と「恥」を知り「人笑へ」にならな^①いことをよしとする倫理観が描かれるようになる。また、『伊勢物語』では、「恥づかし」「つらし」「くるし」の語に絶望や悲観が見られ、都で相手を信じて待ち続ける態度や相手

への誠実な言動といった「みやび」的な美意識に反する行為に対する恥の感覚が描かれており、男女間の恋愛ルールの規範や貴賤の恋の否定等の倫理観が見られる。^②

一方『源氏物語』においては、名詞「はぢ（恥九・辱一）」（二〇例）「もの恥」（九例）「恥づかしさ」（三三例）「恥づかしげ（さ）」（四例）の用例に比べて、形容詞「恥づかし」（一九三例）が多用され、「心恥づかし」（二四例）「そら恥づかし」（二例）「もの恥づかし」（一例）もあり、形容動詞「恥づかしげなり」（六三例）「心恥づかしげなり」（二二例）、動詞「恥づ」（二五例）「恥ぢらふ」（一五例）「はづかしむ（九例）恥づかしむ一、辱む八」（九例）等様々な語の広がりが見られる。

そこで、まず「恥」「恥づかし」それぞれの内容についてと「恥づかし」の前期物語との相違点、次に、「恥づかし」他の形容詞や形容動詞、動詞が各人物の造型とどのように関

わっているのか、そして、それらを通して『源氏物語』に描かれた美意識と倫理観とはどのようなものなのかを明らかにしていく。そのために、「恥」「恥づかし」等を感じる主体とその客体、恥の内容を追っていく。王朝文学における「恥」とは、「劣等感や自省の念、また、過剰な自意識の種となるような欠陥・失敗・不名誉など」（秋山虔編『王朝語辞典』）であるので、特に主体の自意識や客体（恥を感じる相手）との関係にも注目していく。また、「恥づかし」の意味は①自分の至らなさを思っ
て気がひける、②相手が立派すぎて・優れていて気がひける（『岩波古語辞典』『角川古語辞典』）の二大別できそうなので、主体の劣等意識と客体への賞賛に分けて考えていく。

中川正美氏は、平安文学の中で特に用例数の多い『源氏物語』の「はづかし」は物語を構築する上での固有の方法となっており、「恥」の用法とは違った用法を通して人物の多岐多様な想いを細やかに描写している³⁾とする。各用法を見てもみると、確かに社会通念的である「恥」に比べて、「恥づかし」は身分や権勢を踏まえた人間関係における各人物の繊細な心の動きが表されている。そこで筆者は、『源氏物語』における「恥」と「もの恥ぢ」の違い、「恥づかし」の前期物語との違い、他の形容詞や動詞、形容動詞についても述べる。

二 「恥」と「もの恥ぢ」の違い

『源氏物語』の「恥」（一〇例）「もの恥ぢ」（九例）中、まづ男女の恋愛がらみの用例が八例もあり思うようにいかない相手の反応が恥辱だとされている。

1. 「恥」に表れた社会性

次に「恥」には、社会的な非常識が描かれている。例えば、桐壺更衣にすっかりした後見人のいないこと、博士らの装束が身に付かず不細工なこと、舞人選出から外れたこと等である。中でも、死の穢れや流罪は重大な恥辱として表されている。

日々に重りたまひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、母君泣く泣く奏してまかでさせたまつりたまふ。かかるをりにも、あるまじき恥もこそと心づかひして、皇子をばとどめたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。（桐壺巻二二頁）

母北の方は神聖な宮中を更衣の死で穢すような不面目な事態になつては大変（「もこそ」と、光源氏を宮中に残して更衣を退出させる。桐壺帝も「限り」（宮中で死ぬ禁忌）によりようやく退出を許す。

濁りなき心にまかせてつれなく過ぐしはべらむもいと憚り多く、これより大きな恥にのぞまぬさきに世をのがれなむと思うたまへ立ちぬる」などこまやかに聞こえた

まふ。(2須磨卷一六六頁)

光源氏が左大臣に別れを惜しむ場面であるが、自分には謀叛の罪などは決してないが、これ以上の恥辱(遠國への流罪)にあわないうちに自ら遠方に流れていくことを告げている。これら禁忌に触れることや刑罰に関わることは重大な「恥」であると思われる。

2. 「もの恥ぢ」に表れた女君らの性格

一方、「もの恥ぢ」には、他者の目を通して女君らの特徴的な性格が表されている。

ところせき御もの恥を見あらはさむの御心もことになうて過ぎゆくを、またうち返し、見まさりするやうもありかし、(1末摘花卷二八九頁)

これは初めて逢った末摘花の動転ぶりにうんざりしている光源氏の心中である。命婦の言葉を強く拒むこともできずおっとり構え、若女房らが案じたように男性と逢う心構えも全くとなく光源氏と逢い、思い乱れる末摘花の性格がよく分かる。同時に、故常陸宮家が邸だけでなく人心も荒れている様子も分かる。

いとつらし、つらし」と泣き叫ぶものから、さすがにも
の恥ぢしたるけはひ変らず、なかなかいと疎ましく心憂
ければ、もの言はせじと思す。(4若菜下卷二二六頁)

紫の上が危篤に陥り、六条御息所の死霊が光源氏の前に出現する場面である。物の怪は情念をむき出しにしながらどこ

となく恥じらい奥ゆかしさを見せるので、六条御息所の死霊であると光源氏は納得する。六条御息所の気品高い性格を特徴づけてはいるものの、それゆえにかえって無気味さが増す。

容貌も心ざまも、え憎むまじうらうたげなり。もの恥ぢもおどろおどろしからず、さまよう児めいたるものからかどなからず、近くさぶらふ人々にも、いとよく隠れてゐたまへり。(6東屋卷五〇頁)

中の君の目を通して浮舟の様子である。可憐ではにかみょうも大げさでなく、上品であどけなく、しかし利発そうで声もあるが、末摘花は感情を露わに出しすぎるマイナス面として、六条御息所や浮舟は上品で奥ゆかしいプラス面としてそれぞれ性格が描かれている。

以上、「恥」の内容に着目すると、禁忌に触れることや刑罰に関わることをよしとしない倫理観が描かれている。また、「もの恥ぢ」については、身分が高い(高貴である)こと、装束が整っていること、芸能に精通していること、奥ゆかしく適度な恥じらいを見せる奥ゆかしい女性であること等が社会通念、すなわち、貴族の美意識として描かれている。

三 「恥づかし」の前期物語との違い

次に、「恥づかし」の『源氏物語』と前期物語との違いについて述べる。

1. 『源氏物語』の「恥づかし」

(1) 劣等意識と賞賛

「恥づかし」一九三例中、内容に着目するとこちらも男女の恋愛・結婚がらみの用例が八四例ある。その中でも、光源氏が感じる葵の上の隔意が「恥づかし」(若紫巻二二六頁、紅葉賀巻三二二頁、葵巻四八頁)に表されている。また、葵の上や六条御息所が年上で光源氏に似つかわしくないという思いも「似げなし」「恥づかし」(桐壺巻四八頁、葵巻一九頁)に表され、光源氏と両者の緊張関係が分かる。

そのほか、主体の劣等意識としては近江の君・玉鬘・浮舟それぞれの田舎じみた様子、朱雀帝や臘月夜それぞれの悔恨、女三の宮の尼姿や末摘花や浮舟の修行等出家に関わること、長寿や老醜、無作法や不相応、みすばらしい身なり、低い身分や軽い扱われ方等が挙げられる。他方、賞賛としては博士の娘の学問や帝らの漢詩の詠みぶり、琴の演奏や伝授、高貴さ等が挙げられる。客体に着目すると、高貴さや美質は光源氏が最多(一二三例)であるが、冷泉帝(院)、秋好中宮、女三の宮、内大臣や娘の弘徽殿女御、六条御息所、紫の上、薫、匂宮もそれぞれ高貴な人として人々から認識されて

いる。

(2) 密通における身の縮む思い

密通に関しては、柏木や女三の宮、浮舟それぞれの身の縮む思い、顔向けできない思いが「恥づかし」に表されている。もちろん「恐ろし」という思いもあるのだが、光源氏や藤壺それぞれの思いが「恐ろし」のみであることを考えると、「恥づかし」には身分格差や権力格差、美質格差による更なる緊張関係があるように思われる。

さてもいみじき過ちしつる身かな、世にあらむむことこそまばゆくなりぬれ、と恐ろしくそら恥づかしき心地して、歩きなどもしたまはず。(4若菜下巻二二九頁)

おのづからけしきにても漏り出づるやうもやと思ひしだにいとつつましく、空に目つきたるやうにおぼえしを、まして、さばかり違ふべくもあらざりしことどもを見たまひてけむ、恥づかしく、かたじけなく、かたはらいたきに、朝夕涼みもなきころなれど、身も凍むる心地して、言はむ方なくおぼゆ。(4若菜下巻二五八頁)

ここでは特に、「そら恥づかしき」(一例)と「空に目つきたるやうに(中略)恥づかしく」に注目する。「そら恥づかし」には「天眼照覧なるべし」(『孟津抄』)、「空に目つきたるやうに」には「天眼の事歎歎。いかに隠密する事も四知とて天地人我の四はしる事也。其中にも天の照覧は第一也」(『河海抄』)とあるように、天には隠し事はできず全てお見

通しであるという、光源氏に対する柏木の深刻な罪悪感が表されている。理性では帝妃と密通する大罪にはあたらなないとしながら、感情では政界最高の権力者光源氏に疎んじられたら身の破滅であると畏怖する。

一方、女三の宮も光源氏に対して畏怖する。

ひたおもむきにも怖ぢたまへる御心に、ただ今しも人の見聞きついたらむやうにまばゆく恥づかしく思さるれば、明かき所にだにえゐざり出でたまはず。いと口惜しき身なりけりとみづから思し知るべし。(4若菜下巻二三〇頁)

宮は、御心の鬼に、見えたてまつらんも恥づかしくつつましく思すに、ものなど聞こえたまふ御答へも聞こえたまはねば、(4若菜下巻二四六頁)

宮も、ものをのみ恥づかしくつつましと思したるさまを語る。(4柏木巻二九五頁)

深い考えもなく臆病な性格ゆえとされる女三の宮も、光源氏への露見におびえ、柏木同様、明るい所にさえ出られなくなる。紫の上が小康を得たので女三の宮の所に来た光源氏に對して、後ろめたく感じる女三の宮は返事もできない。光源氏に露見後は、女三の宮が何かにつけて後ろめたく気がねしている様子が小侍従から語られる。女三の宮の心身ともにやつれた容姿を思い浮かべる柏木は、宮のもとに魂がさまよい出てしまうかのような気持ちになる。

この柏木の心情表現と似たような心情表現がなされているのは浮舟である。

女、いかで見えたてまつらむとすらんと、空さへ恥づかしく恐ろしきに、あながちなりし人の御ありさまうち思ひ出でらるるに、またこの人に見えたてまつらむを思ひやるなん、いみじう心憂き。(6浮舟巻一四二頁)

「空さへ恥づかしく」には、匂宮との密通後いつもながら立派な様子子の薫の訪れに、浮舟は匂宮に逢った後ろめたさはどうして薫とも逢えようかと気が咎め、天には隠し通すことはできないと身の縮む思いが表されている。これらの「恥づかし」に表れた、柏木や女三の宮の光源氏に対して畏怖する気持ち、浮舟の薫に対して畏怖する気持ちは、ただ露見を恐れるだけではなく、親密な関係であった庇護者に対する後ろめたさ、気の咎め、罪悪感を表すのではないかと考える。

(3) 光源氏の歌に詠まれた「恥づかし」について
「恥づかし」が和歌で使われている唯一の用例が、光源氏の歌である。

昔胡の国に遣はしけむ女を思しやりてましていかなりけん、この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむことと思ふも、あらむことのやうにゆゆしくて、「霜の後の夢」と誦じたまふ。月いと明うさし入りて、はかなき旅の御座所は奥まで隈なし。床の上に、世深き空も見ゆ。入り方の月影すごく見ゆるに、「ただ是

西に行くなり」と独りごちたまひて、

いづかたの雲路にわれもまよひなむ月の見らむこと
もはづかし

と独りごちたまひて、例のまどろまれぬ暁の空に千鳥い
とあはれに鳴く。(2須磨卷二〇九頁)

須磨の冬、雪景色の特に寂しく身にしみる風情に、合奏を
やめて光源氏の琴の音を聞きながら、皆で涙をぬぐっている
場面である。光源氏は王昭君の故事(『西京雜記』卷二「画
工棄市」)を思い出しながら、このまま都に帰れず紫の上と
永遠に別れることになったらという不吉な予感を抱きなが
ら、王昭君が画工に賄賂を贈っていたなら帝王に一生お仕え
できたのにという詩(「王昭君」大江朝綱『和漢朗詠集』卷
下)の一節を口ずさむ。同詩の月の一節の連想から月光の描
写となり、荒廃した住居の様子(「屋舎壊」三善善宗『和漢
朗詠集』卷下)が描かれる。そして、「唯是西行(不左遷)」
(「代月答」菅家後集)を口ずさみながら、左遷(流罪)で
はないのだから須磨にいるのは一時のことではないか無事帰京
できるだろうと独り苦しい胸の内を吐露しながら歌を詠む。
王昭君の故事から光源氏の紫の上を思う悲しい胸中の吐露
から始まり、菅原道真の左遷と身の潔白を連想した上で、自
身は左遷ではないものの身の潔白は月に対して自信がないと
いうことが「はづかし」に表されていると考える。この「は
づかし」には、藤壺と自分だけが知っている罪というものを

思い起こした上でのものであり、かなり複雑な胸中が表現さ
れているのではないか。他に起きている人もいない深夜に光
源氏の独り言が続いており、道真と比べた自身の境遇をしみ
じみと思い起こしているのが、他人の思惑などは眼中にない
と思われる。

2. 『宇津保物語』の「恥」と「恥づかし」

『宇津保物語』においても、「恥づかし」(六二例)と「恥」
(二九例)では「恥づかし」の用例の方が多い。また、「恥づ
かし」では会話文・手紙文・心内語(心内語は新全集の解釈
に従う、以下同じ)四六例・地の文一六例、「恥」は会話
文・手紙文・心内語・歌二五例・地の文四例であり、それぞ
れ人物の実感の込められた言葉であるのも同じである。しか
し、「もの恥(ぢ)」(五例)、「心恥づかし」(二例)・「面恥づ
かし」(二例、赤面する意)、「恥づかしげなり」(六例)・「心
恥づかしげなり」(二例)はあるものの、『源氏物語』に比べ
れば「恥づかし」の派生語の種類も数も少ない。

(1) 「恥」に表れた政治的意図

特に「恥」の内容で特徴的なのは、立坊や立後の望みがか
なわなないことや権威者に追従しないこと等政治的なことが問
題にされている点である。俊蔭娘―仲忠―いぬ宮と琴の伝授
に関わる一族の繁栄がこの物語の一つのテーマになっている
からであろう。

(2) 「あな恥づかし(や)」という叫び

特に『宇津保物語』では、会話の冒頭や途中に「あな恥づかし(や)」という語句があり、人物のきまり悪いという感情のこもった叫びが聞き手により迫ってくる形で表されている。『古事記』の「かしこし」が発言の冒頭で叫ばれると同時に主従関係が成立することを考えると、「あな恥づかし(や)」という心中の吐露は「恥づかし」の原初的用法なのかもしれない。

(3) 劣等意識と賞賛

『宇津保物語』「恥づかし」の用例(六二例)において、その内容に着目すると、男女の恋愛がらみの用例は七例と少ない。その代わりに、貧しさ(みすばらしい姿や邸・不遇等、六例)や鄙から都の生活に戻ること(二例)、懐妊・出産(四例)、琴の演奏の下手さ(三例)、歌や筆跡の下手さ(二例)等貴族社会の美意識に反する状態が言及されている。しかし、『源氏物語』の「恥づかし」の内容は恋愛がらみも含めて種類が多く、そこに人物の複雑な心情が表されていることも多い。

また、主体が気の置ける人物(客体)として挙げているのが仲忠(四例)・父兼雅(二例)・仲頼妹(兼雅妻の一人、二例)・梨壺(東宮妃の一人、一例)である。そして、「恥づかし」を用いて更に具体的に賞賛されるのは、仲忠(五例)が最多であり、母俊蔭娘(美貌・立派な内侍、二例)・子いぬ

宮(美貌・二例)・仲頼妹(三例)ほか、涼(財力・邸、二例)・あて宮(琴の腕前・美貌、二例)・東宮(二例)・忠こそ・小君・宰相の君・身分の高い貴公子ら・兼雅の妻らである。つまり、琴の伝授に関わる俊蔭娘・仲忠・いぬ宮三代の一族や全ての男性が魅了されるあて宮、また、権勢家としての兼雅・仲忠父子は「恥づかし」という語により特別な存在として位置付けられており、それは『源氏物語』の光源氏や女君ら等も同じである。しかし、『宇津保物語』の「恥づかし」では美貌や気品・配慮の有無、琴(歌・筆跡)の腕前の上下、政治力や財力の有無が問題視されているのに比べて、『源氏物語』の「恥づかし」ではその問題意識の種類が多様である。

3. 『落窪物語』の「恥」と「恥づかし」

『落窪物語』においては、「恥づかし」(三三例)と「恥」(二二例)の用例差は『宇津保物語』や『源氏物語』ほどではない。「面恥づかし」(一例、面目ない意)・「恥がまし」(一例)、「恥づかしげなり」(六例)はあるものの、「恥づかし」の派生語の種類や数は『宇津保物語』よりも少ない。その上、「恥づかし」では会話文・心内語一四例・地の文一九例(新全集では会話や心内語、地の文等がかなり明確に分けられているのでその解釈に従う)で地の文の方が多いのが特徴的である。一方、「恥」は会話文・心内語一七例、地の文二例であり、「恥」の方がより人物の実感の込められた言葉である。

(1) 「恥」に表れた外聞意識

「恥」の客体は特定の人物というより世間であることがほとんどで、貴族社会で外聞が悪いとされている事がよく分かる。四の君の別人(面白の駒)との盛大な結婚、清水寺での車争い・局争い・口争いの敗北、屋形が落ちたみずぼらしい車、立派に改装した三条邸を取られたこと等、少将が中納言家にかくに「恥」をかかせたかが辛辣に描かれている。その他、落窪の姫君への虐待等もあり、継子への虐待を「恥」と表すことにこの物語の一つの主張があるように思われる。

(2) 「恥づかし」に表れた繊細な心情

「恥づかし」が賞賛の意味で使われているのは、あこぎが叔母に几帳を借りる手紙の中で架空の人物に対してだけで、用例のほとんどが劣等意識である。しかし、その劣等意識の中に各人物の相手の思惑を気にする繊細な心情が表されているところが特徴的である。例えば、落窪の姫君の、少将の訪れを待ち焦がれる気持ち、みすぼらしい身なりや鏡箱を取り上げる継母の様子、「落窪の君」という呼び名を少将に知られた際のきまり悪さ等が丁寧に描写され、彼女の不遇な様子や細やかな心の動きがよく分かる。また、父中納言やその長男越前守それぞれの落窪の姫君の昔の処遇に対する反省は、時の権勢に媚び自身の栄達を願う気持ちに基づいているのであろう。しかし、落窪の姫君への虐待を聞いて意気消沈する越前守の思いや美しい姫君を落窪に押し込め彼女はどうか

思っただろうと反省する中納言の思いが丁寧に描かれ、それらの思いを「恥づかし」とするところにもまた、この物語の一つの主張、すなわち、継子いじめへの否定があるように思われる。

以上、「恥」「恥づかし」の各用法は、もちろんそれぞれの物語のテーマや特色によつて大きな違いがある。しかし、『宇津保物語』における貴族の美意識や政治意識に基づいた常識的な判断に比べると、『落窪物語』の方が人物のより具体的で細やかな心情が表されている。「恥」「恥づかし」等の語句を通して、物語の中で特別な位置にいる人物、貴族社会の常識、密通の罪意識も含めた人物の繊細な心情や人物像、これらを明確に表しているのが『源氏物語』であると言えるのではないか。

四 「心恥づかし」に表れた女君の高貴な人物像の
確かさ

『岩波古語辞典』『角川古語大辞典』によると、「心恥づかし」の意味は「恥づかし」と同様であるが、「心」(精神、思慮、情等)が「恥づかし」と思われる状態、対象に緊張を感じるほど強い関心を示している状態である。それによって、対象である女君らの気品ある人物像が確かなものとなっている。

せめて従ひきこえざらむも、かたじけなく心恥づかしき御けはひなれば、「ただかばかりにても、時々いみじき愁へをだにはるけはべりぬべくは、何のおほけなき心もべらじ」などたゆめきこえたまふべし。(2賢木巻一頁一頁)

ここでは光源氏との過ちを決して繰り返すまいとする藤壺の強い意志が分かり、光源氏もたじろぐ凜としたたがずまいであることが彼の行動を制御する。その後東宮の即位に向けて藤壺は、後見役としての光源氏を大切にしつつ、秘事の露見を避けるべく、中宮の位を退き出家を選択する。冷静に状況を判断して対処していく藤壺の、光源氏を圧倒するほど高貴な人柄がよく分かる。

なほかう身を沈めたるほどは、行ひよりほかのことは思はず、都の人も、ただなるよりは、言ひしに違ふと思さむも心恥づかしう思さるれば、気色だちたまふことなし。事にふれて、心ばせありさまなべてならずもありけるかなとゆかしう思されるにしもあらず。(2明石巻二三七頁)

以前に入道の娘のことを聞いていた光源氏の関心は高まるが、流浪の身であることと都の紫の上の気持ちをおもんばかり、彼の行動は一旦制御される。須磨退去の際に紫の上の同伴を断り長引いたら迎えようと言った光源氏が、退去先で他の女性に心を移したら、紫の上が誓言違反だと思うだろ

うと気恥ずかしく思う。こちらも光源氏の行動を制御するほどの紫の上の理想的な人柄や二人の親密な関係が分かる。

ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。(中略)人ざまいとあてにそびえて、心恥づかしきけはひぞしたる。(2明石巻二五八頁)

六条御息所に似ている明石の君の様子は、光源氏の行動を一旦は制御する。実際に逢つてみて予想以上に優れた明石の君の気品高い人柄に光源氏の愛情も増さるが、所詮流浪先の無聊を慰める相手であり、紫の上や世間の評判を思い「人に知られじ」と思う相手である。前述したが、ここでも身分の低い明石の君の予想以上の気品高い人柄が分かる。このように、光源氏が「心恥づかし」と感じる藤壺・紫の上・明石の君は、身分格差意識はあるものの、高貴な、気品高い人物として彼に認識されており、そのまま物語の中でも高貴な、気品高い人物として確かに描かれていると言える。

五 「恥づ」「恥じらふ」に表れた光源氏の超絶的美質と美意識

『岩波古語辞典』『角川古語大辞典』によると、「恥づ」の意味は自分の至らぬ点を思つて気が引けることであり、劣等意識の意味合いが強い。「恥じらふ」の意味は相手の意思表示に對しはにかむことである。

1. 「恥づ」に表れた光源氏の超絶的美質

「恥づ」二四例中、光源氏に対するものが三例ある。

源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡
らせたまふ御方はえ恥ぢあへたまはず、（一桐壺四三頁）
桐壺帝の妃たちが感じる光源氏の超絶的美質は、若い頃から
際立っている。

うちそばみて書いたまふ手つき、筆とりたまへるさまの
幼げなるも、らうたうのみおぼれば、心ながらあやし
と思す。「書きそこなひつ」と恥ぢて隠したまふを、（一
若紫卷二五九頁）

「いで弾きたまへ。才は人になむ恥ぢぬ。想夫恋ばかり
こそ、心の中に思ひて紛らはす人もありけめ、面なく
て、かれこれに合はせつるなむよき」と切に聞こえたま
へど、（三常夏卷二二二頁）

女君らが感じる劣等意識は若紫はその筆跡であり、玉鬘は
その和琴の腕前である。現代風の手本で練習すればさらに上
手になると思ったり、芸事は恥ずかしがらず人前で演奏すべ
きだと玉鬘に言ったりする光源氏は、当代随一の書き手であ
り弾き手である都人である。

2. 「恥ぢらふ」に表れた光源氏的美意識

また、「恥ぢらふ」一五例中、光源氏に対するものは九例
ある。以下は、光源氏に対して「恥ぢらふ」女君らの様子が
光源氏の間を通して描かれているところに、その美意識を伺

うことができる。

女恥ぢらひて、

山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶え
なむ

心細く」とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、（一
夕顔卷一六〇頁）

恋の道行きは初めてだがあなたは経験があるかという光源
氏の問いに夕顔が恥ずかしそうに答える場面である。夕顔の
深刻な恐怖に全く気づかない光源氏であるが、夕顔の「恥ぢ
らひ」は恋愛経験が豊富だと言われたことへの恥ずかしさで
ある。

例のしじまもころみむと、とかう聞こえたまふに、い
たう恥ぢらひて、口おほひしたまへるさへひなび古めか
しう、ことごとしく儀式官の練り出でたる肘もおぼえ
て、さすがにうち笑みたまへる気色、はしたなうすずろ
びたり。（一末摘花卷一九四頁）

何とか話させようとする光源氏に対して、ひどく恥ずかし
がる末摘花の古風な様子やぎくしゃくした動作が美とは程遠
い状態であることが示されている。

小さき御几帳ひき上げて見たてまつりたまへば、うち側
みて恥ぢらひたまへる御さま飽かぬところなし。灯影の
御かたはら目、頭つきなど、ただかの心尽くしきこゆる
人に違ふところなくもなりゆくかな、と見たまふにいと

うれし。(2葵卷六八頁)

葵の上の出産・逝去で二ヶ月ぶりくらいに見る紫の上が成長し、光源氏に対して恥ずかしがる様子が、藤壺にそっくりで不足な点が全くないことに光源氏は満足する。

「つれなくて、人の御容貌推しはからむの御心なめりな。さて、いづれをとか思す」と聞こえたまへば、「それも鏡にてはいかでか」と、さすがに恥ぢらひておはす。(3玉鬘卷一三五頁)

不遇時代を経て、光源氏の正月の衣配りで、器量に合った衣装をといて紫の上に、衣装の色や柄で他の女性たちの容貌を推量しているがあなたはどの衣装が自分の器量に合っているかという光源氏の問いに、紫の上は恥ずかしく思う。

幼き心地にすこし恥ぢらひたりしが、やうやう打ち解けて、もの言ひ笑ひなどして陸れたまふを見るままに、にほひまさりてうつくし。(3松風卷四一五頁)

后がね候補として紫の上に養育させようと光源氏が考え始める場面である。三歳の明石の姫君がはにかみながら、だんだん打ち解けてくる、目立って美しい顔色を光源氏は満足げに眺めている。

手習などして、うちとけたまへりけるを、起き上がりたまひて、恥ぢらひたまへる顔の色あひいとをかし。(3胡蝶卷一八五頁)

光源氏が玉鬘に恋情を告白する場面である。若い玉鬘の顔色がつやつやとしているのに加え、突然の訪問で恥ぢらいためにより赤くなっている様子が光源氏の目には大変魅力的に映る。

さもこそはよるべの水に水草あめ京のかざしよ名さへ忘るる

と恥ぢらひて聞こゆ。げに、といとほしくて、(4幻卷五三八頁)

更に、晩年の光源氏の目にも、葵祭りの日に葵にかけてさりげなく恨む歌を恥ぢらいながら詠む中将の君(光源氏の召人)の様子が好ましく映る。

一方、密通後の女三の宮の恥ぢらいには、光源氏に対する身の縮む思いが色濃く出ている。

そこはかと苦しげなることも見えたまはず、いといたく恥ぢらひしめりて、さやかにも見あはせてまつりたまはぬを、久しくなりぬる絶え間を恨めしく思すにやといとほしくて、(4若菜下卷二二二頁)

女三の宮の恥ぢらう様子が、光源氏には紫の上の看護で長い間留守にした恨みかと思われる。が、女三の宮にとって、直前の「恥づかし」と同様、柏木との過失に怯え、光源氏の目を直視できないという深刻な苦悩が表れている。

「この御返りをばいかが聞こえたまふ。心苦しき御消息にまるこそいと苦しけれ。思はずに思ひきこゆることあ

りとも、おろかに人の見答むばかりはあらじとこそ思ひはべれ。誰が聞こえたるにかあらむ」とのたまふに、恥ぢらひて背きたまへる御姿もいとらうたげなり。いたく面瘦せて、もの思ひ屈したまへる、いとどあてにをかし。(4若菜下巻二六八頁)

光源氏との仲を心配する朱雀院の手紙に、自分の落度を責められていると思つた光源氏は、柏木と密通したあなたは心外な方だが粗略な扱いは絶対にしないと女三の宮に嫌味たつぶりの言葉をかける。女三の宮は柏木との過失に怯え、光源氏の目を直視できない。その様子が光源氏の前には高貴で美しく映り、彼が密通した女三の宮への愛執にとらわれていることが分かる。

「恥ぢらふ」には、時代に合わせた現代風なもの、当意即妙な応答、高貴で非の打ち所のない美しさ、器量や人柄に合った衣装、若々しくつややかな上に恥じらいを加えて更に赤くなっている顔色、当意即妙な返歌等をよしとする光源氏の美意識が表れている。

しかし、女三の宮の「恥ぢらふ」には、光源氏の愛執が表れ、彼女自身の光源氏に畏怖し苦惱する思いが示されていると考える。

六 「恥づかしげなり」「心恥づかしげなり」に表れた人物像の客観性

『岩波古語辞典』によると、「恥づかしげなり」の意味は、こちらが恥づかしく感じるほどの相手の(立派な)様子であり、賞賛の意味合いが強い。心の動きを表す形容詞「恥づかし」が形容動詞になると、賞賛される状態として人々に確実に認識され客観性が増していると言えるのではないか。また、「心恥づかしげなり」も「心恥づかし」と同様に、対象に緊張を感じるほど強い関心を示している状態の客観性が増していると思える。

1. 「恥づかしげなり」に表れた各人物像の客観性

(1) 光源氏目線による藤壺・葵の上・紫の上の人々が見ることはできない女君たちであるので、光源氏目線による藤壺・葵の上・紫の上の高貴さが、「恥づかしげなり」でも繰り返して表されている。

宮もあさましかりしを思し出づるだに、世ととももの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深く思したるに、いと心憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとうちとけず心深く恥づかしげなる御もてなしなどのなほ人に似させたまはぬを、などかなのめなることだにうちまじりたまはざりけむと、つらうさへ思さる。(1若紫巻二二二頁)

藤壺の実家で光源氏が逢う場面であるが、藤壺の心情からその様子を凝視する光源氏の心情に移っていく文脈である。優しく情の分かるかわいらしきがあるが打ち解けるのではなく遠慮があり慎み深い様子で、不足な点が全くなく完全無欠の藤壺像が「恥づかしげなる」に表されている。

気高う恥づかしげなるさまなども、さらにこと人とも思ひわきがたきを、なほ、限りなく昔より思ひしめきこえてし心の思ひなしにや、さまことにいみじうねびまさりたまひにけるかなとたぐひなくおぼえたまふに、心まどひして、やをら御帳の内にかかづらひ入りて、御衣の襟をひき鳴らしたまふ、(2賢木卷一一〇頁)

光源氏が藤壺の寝所に近づき、似ている紫の上も及ばないほどその気高い美しさに思い惑って侵入する場面である。藤壺の高貴ゆえの美質が「恥づかしげなる」に表され、光源氏が惑乱する要因となっている。

あまりうるはしき御ありさまの、とげがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへるを、さうざうしくて、(1帚木卷九一頁)

からうじて、「問はぬはつらきものにやあらん」と、後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高うつくしげなる御容貌なり。(1若紫卷二二七頁)
四年ばかりがこのかみにおはすれば、うちすぐし恥づかしげに、盛りにととのほりて見えたまふ。(1紅葉賀卷

三三三頁

御手をとらへて、「あないみじ。心憂きめを見せたまふかな」とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げてうちまもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、いかがあはれの浅からむ。(2葵卷三九頁)

豪華に飾り立てられた左大臣家できちんとしている葵の上の「恥づかしげ」な様子は、北の方として信頼がおけるもの、とりつくしまもなく光源氏は物足りなく思う。また、葵の上が恨み言を言う様子も気品高い美しさである。そして、返事も格別で年上にふさわしい気品を備えている。しかし、六条御息所の物の怪に取り憑かれた葵の上はいつもとは様子が違い、いつもなら気づまりなまなざしが光源氏をじつと見つめている。葵の上の「恥づかしげ」な様子は、逆に光源氏に隔意を抱かせ彼を遠ざげる要因となっているかのようである。

すこし濡れたる御単衣の袖をひき隠して、うらもなくなつかしきものから、うちとけてはたあらぬ御用意など、いと恥づかしげにをかし。限りなき人と聞こゆれど、難かめる世をと思しくらべらる。(4若菜上卷七〇頁)
あるべき限り気高う恥づかしげにととのひたるにそひて、はなやかにいまめかしくにほひ、なまめきたるさま

さまのかをりも取りあつめ、めでたき盛りに見えたまふ。(4若菜上巻八九頁)

「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心なたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」とて、残り多げなるけはひ恥づかしげなり。(4若菜下巻二〇七頁)

光源氏の中で幼稚な女三の宮と比べるとよけいに紫の上の高貴さが際立つ。涙で濡れた袖を隠して何事もなく振る舞いながら、すっかり許したわけでもない紫の上の心遣いが「恥づかしげ」で光源氏を引きつけてやまない。また、高貴な女三の宮や明石の女御と比べてもすばらしく、すべてに気品があり気恥ずかしくなるほど整い、華やかで現代風で優美でつややかな美しさが全て備わり、女盛りの比類ない人として光源氏がとらえている。しかし、光源氏の半生の述懐に、苦惱こそが生きる支えであったと言いつつ、言い残したことがたくさんあるような紫の上の真剣さには、光源氏も緊張する。

御手などのいとめでたきを、院御覧じて、何ごともいと恥づかしげなめるあたりに、いはけなくて見えたまふらむこといと心苦しう思したり。(4若菜上巻七六頁)

紫の上からの返事を見た朱雀院が、万事に優れた彼女と娘の女三の宮を比べて、思い悩む場面である。「恥づかしげ」には、紫の上がその地位だけでなくそのすばらしい人柄も朱雀院から認められたことを表すと思われる。

以上より、藤壺の完全無欠の高貴な美しさ、葵の上の端麗な気高い美しさ、紫の上の比類ない気高い美しさが、光源氏の中でそれぞれ確かな人物像として「恥づかしげなり」によって印象づけられていると言える。

(2) 女君目線による光源氏

光源氏の超絶的な美質は「恥づかしげなり」によっても客観性が増している。

おしなべての世の人の、めできこゆらむ列にや思ひなされむ、かつは軽々しき心のほども見知りたまひぬべく、恥づかしげなめる御ありさまと思せば、なつかしからむ情もあいなし、よその御返りなどはうち絶えて、おぼつかなかるまじきほどに聞こえたまひ、人づての御答へはしたなからで過ぐしてむ、(2朝顔巻四八七頁)

光源氏の求愛に、朝顔が冷静に判断する心内が語られている。光源氏の超絶的な美質を「恥づかしげ」とし、そういう人間に世間並またはそれ以下に扱われるくらいなら手紙のやりとりだけの関係にしようかと決意している。

「咲ける岡辺に家しあれば」など、ひき返し慰めたる筋など書きませつつあるを、取りて見たまひつつほほ笑みたまへる、恥づかしげなり。(3初音巻一五〇頁)

六条院の冬の町を訪れ、明石の君の手習いや明石の姫君を詠んだ歌を見ている光源氏の立派さを「恥づかしげなり」と表している。

朝顔や明石の君にとつて、光源氏の超絶的な美質が客観的に描かれていると言える。

2. 「心恥づかしげなり」に表れた各人物像の客観性

「心恥づかしげなり」一二例中、八例が宇治十帖で使われている。

(1) 人々目線による薫・大君・中の君

心にくき女のおはする所なれば、若き男の心づかひせぬなう、見えしらがひさまよふ中に、容貌の良さは、この立ち去らぬ藏人少将、なつかしく心恥づかしげになまめいたる方は、この四位侍従の御ありまさに似る人ぞなかりける。(5竹河卷六四頁)

おのづからこそ、静かなる思ひかなひゆけど、残り少なき心地するに、はかばかしくもあらで過ぎぬべかめるを、来し方行く末、さらにえたどるところなく思ひ知らるるを、かへりては心恥づかしげなる法の友にこそはものしたまふなれ」などのたまひて、かたみに御消息通ひ、みづからも参でたまふ。(5橋姫卷一二三頁)

いと心恥づかしげになまめきて、また、このたびはねびまさりたまひにけりと、目もおどろくまでにほひ多く、人にも似ぬ用意など、あなめでたの人やとのみ見えたまへるを、姫宮は、面影さらぬ人の御事をさへ思ひ出できこえたまふに、いとあはれと見たてまつりたまふ。

(5早蕨卷三五五頁)

親しき御仲らひながらも、人ざまのいと心恥づかしげにものしたまへば、え強ひてしも聞こえ動かしたまはざりけり。(5早蕨卷三六六頁)

すずろに、見え苦しう恥づかしくて、額髪などもひきつくろはれて、心恥づかしげに用意多く際もなきさまぞし
たまへる。(6東屋卷五一頁)

薫は光源氏の子として、優しく立派で優美な貴公子として並ぶ者がいないと世間に認識されている。また、八の宮は薫のことを伝える阿闍梨に対して、薫の優れた道心を尊敬し、「法の友」としての交流が始まる。更に、中の君には薫が気恥ずかしいほど優美な様子に感じられ、亡き大君のことまでが思い出される。また、縁談を断られた夕霧は不快に思うものの、薫の立派さに気兼ねして強引に勧めることもしない。そして、浮舟の母中将の君は薫の気がひけるほど慎み深くすばらしい姿に感動する。

うちとくとはなけれど、さきざきよりはすこし言の葉つづけてものなどのたまへるさま、いとめやすく、心恥づかしげなり。かやうにてのみは、え過ぐしはつまじと思ひなりたまふも、いとうちつけなる心かな、なほ移りぬべき世なりけりと思ひゐたまへり。(5椎本卷二〇六頁)

以前よりは多少言葉が続ける大君の様子を、薫は奥ゆかしい感じであると思ひ、恋心が募っていく。

「いとさ言ふばかりの幼げさにはあらざめるを。うしろ

めたげに気色ばみたる御まかげこそわづらはしけれ」と
て笑ひたまへるが、心恥づかしげなる御まみを見るも、

心の鬼に恥づかしくおぼゆる。(6東屋巻七五頁)

何ばかりの親族にかはあらむ、いとよくも似通ひたるけは
ひかな、と思ひくらぶるに、心恥づかしげにてあてなると
ころは、かれはいとこよなし、これは、ただ、らうたげに
こまかなるところぞいとをかしき。(6浮舟巻一二二頁)

中将の君は匂宮侵入事件を聞き、中の君の気後れするよう
な目元をみるにつけても、姉の夫を横取りするくらい年齢
だと言われているようで気が咎める。また、匂宮は浮舟を見
て中の君と似ているが、気後れするくらい気品高い様子は中
の君の方が優れ、かわいらしく美しい点は浮舟がよいと思う。

宇治十帖で薫や大君、中の君が「心恥づかしげなり」と表
されるのは、薫は表向き光源氏の子として、大君や中の君は
八の宮の子として、その高貴な美貌が強調されているのであ
ると思われる。世間はもちろん、八の宮や夕霧までもが認め
る薫の美質は、光源氏のものとは違って「まめ人」らしさも
含むものの、客観化されたものとして描かれていると考え
る。その薫に「心恥づかしげなり」とされる大君、匂宮から
も「心恥づかしげに」とされる中の君、この四人の恋愛が成
り立つ、客観的な基本的人柄として「心恥づかしげなり」が
使われていると考える。

七 おわりに

社会通念的である「恥」に比べて「もの恥ぢ」は女君らの
性格を表す。前期物語に比べて、『源氏物語』の「恥づかし」
には身分や権勢を踏まえた人間関係における各人物の繊細な
心の動きがよく表されている。第一部で多様な劣等意識、第
二部で密通における罪責意識、第三部で各人物像がそれぞれ
表されているところに独自性がある。

次に、「恥づかし」等の語が各人物の造型とどのように関
わっているのかであるが、「恥づかし」には高貴でない人々
の劣等意識と高貴な人々への賞賛が表され、高貴さや芸術、
学問等に秀でている人々とそうでない人々が確実に描き分け
られている。特に密通に関する「恥づかし」では、柏木や女
三の宮、浮舟それぞれの庇護者に対する身の縮む思いが鮮明
に描かれている。「恥づかし」は主体と客体の身分差等の人
間関係が明確に表される語であるので、「恥づかし」と思っ
た人物やその様子を見ている人物の繊細な心の動きが鮮やか
に描かれ、その結果それぞれの人物像も鮮明に浮かび上がっ
てくる。また、「心恥づかし」では女君の高貴な人物像が確
かな感覚として描かれている。そして、「恥づ」という動詞
になると、恥づかしく思われる光源氏の超絶的美質が明らか
になり、「恥ぢらふ」には逆に光源氏自身の美意識が表され
ている。また、「恥づかしげなり」「心恥づかしげなり」とい

う形容動詞では、そのように思われる人物像の客観化により、より強固な人物像が明らかになってくる。

そして、それらを通して『源氏物語』に描かれた美意識と倫理観であるが、「恥づかし」とその派生語には、都人の高貴さや芸術や学問に秀でた点、現代風で洗練された身のこなし等をよしとする美意識が明確に表されている。また、「恥」には禁忌に触れることや流罪は避けるべきこと、「恥づかし」「さら恥づかし」には密通は許されないことという倫理観が鮮明に表されている。その結果「恥」「恥づかし」という語は同じでも、使用される一つ一つの場面で、その内容の深刻さや人々の意識には大きな違いが出てくる。平安期の貴族社会では、「恥」の意識が強い倫理性を發揮し、世間がどのように感じるかということが重要視されたという。『源氏物語』の「恥」「恥づかし」等に表れた美意識も含めて、人々の行動規範となる倫理観が表されていると考える。

* 『源氏物語』本文は新編日本古典文学全集による。『河海抄』は玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』（角川書店 一九六八年）、『孟津抄』は野村誠一編『源氏物語古注集成 第四〜六巻 3版』（桜楓社 一九九三年）による。

注

1 古屋明子『竹取物語』に表れた恐怖と倫理観」大東文化大学

日本文学会「日本文学研究 第62号」二〇二三年二月

2 古屋明子『伊勢物語』に表れた絶望・悲観と倫理観」大東文化大学紀要 第61号 人文科学編 二〇二三年二月

3 中川正美「源氏物語の人間関係―「恥づかし」に見る種々相」

森一郎・岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望 第二輯』

三弥井書店 二〇〇八年

この論文において中川氏は、「恥づかし」の用法として次の四点を挙げている。

イ 自身が相手や世間に対して劣っていると感じたり、落ち度を自覚して恥じる。

ロ 自分に負い目や落ち度があるので、相手がすばらしいだけに引け目を感じる。

ハ 相手をすばらしいとみて緊張したり、自身の振る舞いに気を付けようとする。

ニ 相手を賛嘆する。

筆者は『岩波古語辞典』『角川古語大辞典』に基づき、二を賞賛、イロハをまとめて劣等意識とした。

4 新編日本古典文学全集『落窪物語』卷之二 一六二頁頭注